

漢方特別講座テキスト

生薬解説

芒硝

日本漢方協会

【生薬の参考資料作成に当たって】

日本漢方協会

一、本講座の生薬解説についての参考のため、本資料を作成した。

二、編集対象の書籍は左記の通りであるが、左記の掲載順序がそのまま編集順序となっている。

なお、編集順序の意図は全体像を参考にするため、日中の局法等を掲載した。次に、古典類を年代順に配列し、最後に中医学の生薬解説書を収載した。また、万病回春解説の中から生薬に関する箇所を抜粋し参考に作成した。

- (1) 日本薬局法および日本薬局法外生薬規格
 - (2) 中華人民共和国薬典
 - (3) 和漢薬百科図鑑〈難波 恒雄 著〉
 - (4) 神農本草経〈近世・漢方医学書集成53 森立之〉
 - (5) 本草綱目〈李 時珍 国訳 本草綱目〉
 - (6) 本草備要〈王 昂 文光図書公司印行本および寺師 睦宗 訓〉
 - (7) 薬徴〈吉益 東洞・西山 英雄 訓訳 未収載生薬は近世・漢方医学書集成11 吉益 東洞〉
 - (8) 古方薬品考〈近世・漢方医学書集成56 内藤 尚賢〉
 - (9) 新古方薬囊〈荒木 性次 著〉
 - (10) 漢薬の臨床応用〈神戸中医学研究会 訳編〉
 - (11) 処方理解のための漢方配合応用および続編〈翻訳 医学研究会 監修 洪 輝騰・根本 光人〉
- (註) 万病回春解説〈松田 邦夫 著〉

一、全文を収載するとかかりのページ数となるので必要と思われる部分のみ抜粋し編集した。ご了承願いたい。

一、編集の都合上、各原本と掲載位置、順序等が異なる事、また編集の掲載ミス等も予測されるが、この点も併せてご理解とご了承を願いたい。お気付きの点があればご指摘願えれば幸いです。

芒 硝

Mangxiao

NATRII SULFAS

本品为硫酸盐类矿物芒硝族芒硝，经加工精制而成的结晶体。主含水硫酸钠($\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$)。

【性状】 本品为棱柱状、长方形或不规则块状及粒状。无色透明或类白色半透明。质脆，易碎，断面呈玻璃样光泽。无臭，味咸。

【鉴别】 本品的水溶液显钠盐（附录27页）与硫酸盐（附录28页）的鉴别反应。

【检查】 铁盐与锌盐 取本品5g，加水20ml溶解后，加硝酸2滴，煮沸5分钟，滴加氢氧化钠试液中和，加稀盐酸1ml、亚铁氰化钾试液1ml与适量的水使成50ml，摇匀，放置10分钟，不得发生浑浊或显蓝色。

镁盐 取本品2g，加水20ml溶解后，加氨试液与磷酸氢二钠试液各1ml，5分钟内，不得发生浑浊。

干燥失重 取本品，在105℃干燥至恒重，减失重量应为51.0~57.0%（附录31页）。

重金属 取本品2g，加稀醋酸2ml与适量的水溶解使成25ml，依法检查（附录42页—法），含重金属不得过百万分之十。

砷盐 取本品0.2g，加水23ml溶解后，加盐酸5ml，依法检查（附录44页），含砷量不得过百万分之十。

【含量测定】 取本品约0.4g，精密称定，加水200ml溶解后，加盐酸1ml，煮沸，不断搅拌，并缓缓加入热氯化钡试液（约20ml），至不再生成沉淀，置水浴上加热30分钟，静置1小时，用无灰滤纸或称定重量的古氏坩埚滤过，沉淀用水分次洗涤，至洗液不再显氯化物的反应，干燥，并炽灼至恒重，精密称定，与0.6086相乘，即得供试量中含有 Na_2SO_4 的重量。本品按干燥品计算，含硫酸钠(Na_2SO_4)不得少于99.0%。

【性味与归经】 咸、苦、寒。归胃、大肠经。

【功能与主治】 泻热通便，润燥软坚，清火消肿。用于实热便秘，大便燥结，积滞腹痛，肠痈肿痛；外治乳痈，痔疮肿痛。

【用法与用量】 6～18g；外用适量。

【注意】 孕妇禁用。

【贮藏】 密闭，在30℃以下保存，防风化。

78—4 芒硝 (ばうしょう) NATRIUM SULFURICUM

『神農本草經』の上品に「朴消」の原名で収載されている。『神農本草經』の上品にはこの他「消石」が収載され、また『名医別録』には「芒消」が収載され、朴消の別名に「消石朴」(別録)、消石の別名に「芒消」(別録)をあげ、この3者は古来から非常に混乱していた。また『本草綱目』では「朴消」の項に「別録の芒消、嘉祐の馬牙消を併せ入れる」とし、更に混乱の基を作った。馬志は「消は本体に対する名、石は堅白なるに對する号であつて、朴とは未だ化せざるもの意味である」といい、李時珍は「この物は水に遇えれば消け、またよく諸種のもの消かし化すところから消といふのである」といつている。しかし益富博士は「朴消(普通脱水して白色粉状の風化消として存在する)を水中に投じると多量の水をとつて忽ち結晶を析出固化し水はなくなる。この瞬間に水が消え失せる顕著な現象が消の字のもととなったのかも思われる。そういう意味からすれば、朴消は含水硫酸ナトリウム(今の芒消)の古名としてまことに適わしい」と述べている。確かにそのようにも考えられる。ところで朴消について李時珍は「煎煉し盆に入れて凝結して造るもので、その下に在る粗朴な部分を朴消、上にあつて芒のある部分を芒消、牙のあるものを馬牙消といふ。神農本草にはただ朴消と消石だけ掲げ、名医別録にはまた芒消を重複して掲げ、宋の嘉祐本草には更に馬牙消を掲げであるが、消石即ち火消、朴消即ち芒消および馬牙消はみな一物であり、ただ互いに精粗の差があるに過ぎないという事實を知らななめた。諸家のこれに関する知識が曖昧だったために、その説がかように紛糾を来たしたものである」といつているが、これは後述するように明らかに誤認である。芒消は従来含水

硫酸ナトリウム（通称、芒硝）とされてきたが、最初にこれを当てたのは、江戸末期の蘭学者宇田川榕庵で、『遠西医方名物考』の巻8に「榕按ずるに洋船持ち来るガラウベリ塩（glaubersarz 即ち含水硫酸ナトリウム）を見るに其気味形質漢舶来の芒硝とすこしも異なることなし」と記している。しかし、近年正倉院薬物の研究により、保存されている芒硝は1200年を経過した今日でもなお結晶の原形を保っており、もしこれが含水硫酸ナトリウム $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$ ならば当然原形がくずれ、白色粉状の風化硝となっているはずであり、この点に着目し、古来の芒硝は瀉利塩即ち結晶硫酸マグネシウムであることが証明された。芒硝の芒は硝の表面に抽出晶出しているさまが、麥や稻の穎に似ているので芒硝と名付けられ、馬牙硝は四角柱状の巨晶が馬の臼齒の形に似ているからで、共に結晶硫酸マグネシウム $\text{MgSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$ である。李時珍の誤認により江戸期に輸入された芒硝は古来本草の芒硝でなく、朴硝であり、当時これを「灰様芒硝」（このものは風化硝 $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ）と呼んでいる。それ故『傷寒論』、『金匱要略』等に収載された処方中の芒硝は「瀉利塩」を用うべきである。また消石について、陶弘景は「消石の療病の功は朴硝と似たもので、仙經では、この物で諸石を消し溶すというが、現在ではその真物の實際を識るものがない。或いは“朴硝と同一山にある。それで一名消石朴というのだ”ともいい、又“一名芒硝という”ともいうが、しかし今の芒硝は朴硝を煉して作ったものだ」といい、蘇敬も「消石は芒硝のことで、また朴硝は一名消石朴という。今は粗悪な朴硝を製煉して、その汁を精製して芒硝を作る。これがすなわち消石である。本経にも一名芒硝とある。後の人が更に芒硝の條をもうけたのは誤りである」といっている。

これらの記事から、古くは芒硝と消石は同一物であり、朴硝が消石を製する原鉱物であることが知れる。それ故朴硝は純粋な含水硫酸ナトリウムでなく、種々の塩類を夾雑したものである。消石の産地として『名医別録』に「一名芒硝、益州（四川省益県）の山谷および武都（甘肅省成県）、隴西（甘肅省臨洮）、西羌（甘肅～青海省）に生ず」とあり、芒硝の産地と同一で、また薬効も芒硝と全く同じである。製塩の際に朴硝、芒硝が副産物として得られることは古くから知られており、『名医別録』の「芒硝は朴硝に生ず」という記事や、朴硝の産地として「益州の山谷に生ず」とあるところからも推察できる。益州は四川省益県で現在では塩井が多く盛んに製塩が行われている。このように消石は芒硝と同一の「瀉利塩」であるが、近世の本草家はこれを消石（硝酸カリウム KNO_3 ）またはチリ硝

石（硝酸ナトリウム NaNO_3 ）に充てている。陶弘景は「一種のものはその色や表面の形状が朴消と大同小異で、握った塩や雪のように臍臍として冰せず、強く焼くと紫青色の煙をあげ灰になり、朴消のように沸して停らない。これが真の消石だという」といつているから、これは硝酸カリウムを指しており、当時「消石」と称するものに2種あったものと思われる。薬用にどちらを用うべきかは今後の課題であろう。

〔基源〕芒硝（朴消）：天然の含水硫酸ナトリウム $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$ または風化消 $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ （これを玄明粉と称する）で数%から10%ほどの滷利塩 $\text{MgSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$ などの塩類を夾雑する。古来の芒消は結晶硫酸マグネシウム $\text{MgSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$ であり、馬牙消、英消、消石なども称した。今日では古方の芒消に『日本薬局方』の乾燥硫酸ナトリウムを用いているが、これは朴消に充てて用うべきである。

〔産地〕中国：河北、山東、河南、四川、江蘇、安徽、山西省などに主産する。

〔成分〕芒硝中には硫酸ナトリウム Na_2SO_4 96～98%を含み、微量の塩化ナトリウム NaCl 、塩化マグネシウム MgCl_2 、硫酸マグネシウム MgSO_4 、硫酸カルシウム CaSO_4 などの無機塩を含む。

〔薬理作用〕硫酸ナトリウムは水には溶解するが、マグネシウム塩と同様、腸管からの吸収はほとんどなく、腸管内に水分が貯留し、そのため腸壁は刺激され、蠕動運動が亢進して瀉下をまねく。塩類下剤の効果は吸収量に反比例し、その溶液の浸透圧に比例して大きくなる。

〔薬味、薬性〕辛，鹹，苦。大寒。

〔薬能〕芒硝は能く燥を潤し、堅を軟らかくする効があり、便を通じる。また火を瀉し、腫を消し、痛みを除く。「内経」に「熱、内に淫するには、これを治するに鹹、寒を以つてし、之を佐するに苦を以つてす」とあり、芒硝は鹹、寒で苦であり、常に苦、寒の大黄と相須つて用いる。成無己は「〔内経〕に“鹹味の下泄は陰である”とあり、又“鹹は稟げ^カる。熱が内に淫せるには、治するに鹹、寒を以つてし、気堅きをば鹹を以つて稟かにし、熱盛んなるを寒を以つて消す”とある。故に張仲景は大陷胸湯、大承氣湯、調胃承氣湯には、いずれも芒消を用いて堅を軟らかにし、実熱を去るのであって、結して堅きに至らざるには用いてはならない」といつている。

〔用途〕緩下，消化，利尿薬として，裏の陽実証であつて腹部に堅塊のあるもの，宿食，

腹滿、心腹部に抵抗のあるものに用いる。大黃と共に配合される場合が多い。

〔処方例〕朴消：橘皮大黃朴消湯（金匱：橘皮、大黃、朴消）、大黃牡丹皮湯（184）。芒消：大承氣湯（187）、桃核承氣湯（209）。消石：大黃消石湯（金匱：大黃、黃柏、消石、梔子）、消礬散（金匱：消石、礬石）、調胃承氣湯（197）。

朴消。味苦寒。生山谷。治百病。除寒熱邪氣。逐六府積聚。結固留癖。能化七十二種石。鍊餌服之。輕身神仙。

朴消（本經上品） 和名 芒硝（含水硫酸曹達）

英譯名 Gamber salt

校正

別錄の芒消、嘉祐の馬牙消を併せ入る。

釋名

消石朴（別錄） 鹽消（綱目） 皮消 志曰く、消は本體に對する名、石

（1）「別錄の芒消、嘉祐の馬牙消を併せ入る」が混乱を起すものと、なつた。（益富）

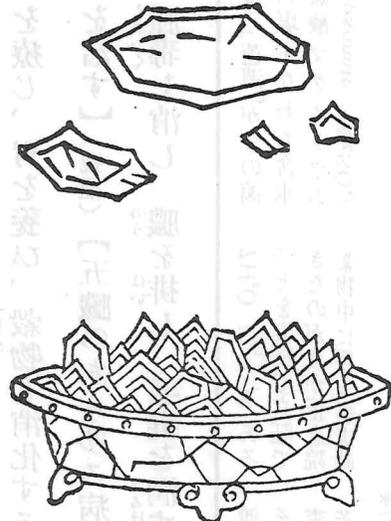
（2）「消石朴」は六四九ページ集解の項参照。（益富）

は堅白なるに對する號であつて、朴とは未だ化せざるものの意味である。芒消、英消は皆これから出るものだから消石朴といふ。

(3)「消し化するところから消といふ」とあるが、朴消(ふつう)脱水して白色粉末の風化消として存在する(を水中に投じると多量の水をとって忽ち結晶を析出固化し水はなくなる。この瞬間に水が消えうせる顕著な現象が消の字のもととなつたのかとも思われる。そういう意味からすれば、朴消は含水硫酸ナトリウム(今の芒消)の古名としてまことに適わしい名である。(益富)

(4)「芒のある部分を芒消 牙あるものを馬牙消」とする芒消の芒はノギのことで朴消の塊の表面に抽出晶出しているさまが、麥や稻のノギに似ているので芒消と名づけられ、馬牙消の名は芒消の四角柱状の巨晶が馬の臼歯の形に似ているからである。(益富)

時珍曰く、この物は水に遇へば消け、またよく諸種(3)のものを消し化(3)するところから消といふのである。鹽鹵(えんろ)の地に生ずるもので、形状は末鹽に似たものだ。すべて



(朴消芒消)

牛、馬の諸皮は必ずこれを用ゐてなめすと
 ころから、今俗間で鹽消、皮消などと呼ぶ
 のである。煎鍊し盆に入れて凝結して造る
 もので、その下に在る粗朴(そぼく)な部分を朴消、
 上に在(4)つて芒(はう)のある部分を芒消、牙(が)あるも
 のを馬牙消(ばがせう)といふ。(5)神農本經にはただ朴

消、消石だけを掲げ、名醫別録にはまた芒消を重複して掲げ、宋の嘉祐本草には馬牙消を更に掲げてあるが、それは消石(6)、即ち火消、朴消、即ち芒消、馬牙消と一物で、ただ精粗の差異があるに過ぎぬといふ事實を知らぬためだ。諸家のこれに關する知識が曖昧(あいまい)だつたために、その説がかやうに紛糾を來したものである。本書には芒消、牙消を同一條に併入することにした。

(5)「神農本經には、ただ朴消、消石だけを掲げ、名醫別録にはまた芒消を重複して掲げ」とある本經の消石は芒消(今の瀉利塩)、別録の芒消は朴消ではないから時珍のいう重複云々は當らない。(益富)

(6)「消石、即ち火消、朴消即ち芒消、馬牙消と一物で、ただ精粗の差異があるに過ぎぬ」とあるは事實に反する。上記のうち消石は芒消に同じく、火消は燂消とも呼ばれ硝酸ナトリウムである。(益富)

(9)「三稜を畏る。」の下、後の版本では「校・諸本を按ずるに大黃これが使となる。」を付加している。(考定者)

(大)閉絶へ月經閉止。

朴消 (本經) 氣味

【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦く辛し、大寒にして毒なし。銀のやうに白く鍊つたものは能く寒し、能く熱し、能く滑し、能く瀝し、能く辛く、能く鹹く、能く酸く、千年地に入つてゐても變らない。權曰く、苦く鹹し、小毒あり。時珍曰く、別錄に列記したことは神仙家の側の説に據つたもので、内容は消石の功用だ。詳細は消石の條を見よ。之才曰く、石韋が使となる。麥句薑を惡む。張從正曰く、三稜を畏る。

主治

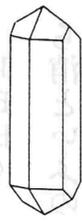
【あらゆる病に寒熱邪氣を除き、六臓の積聚、結固、留癖を逐ふ。よく七十二種の石を化す。鍊つて服餌すれば身を軽くし、神仙となる】(本經)【胃中の飲食物の結熱、留血、(六)閉絶、停痰、痞滿を破り、新陳代謝せしめる】(別錄)【熱脹を療じ、胃を養ひ、穀物を消化する】(鼻疝論)【腹脹、大小便不通、婦人の月經不通を治す】(甄權)【五臓のあらゆる病、及び癥結を通泄し、天行熱疾の頭痛を治し、腫毒を消し、膿を排し、毛髪を潤す】(大明)

(10)「芒消」が今の瀉硫酸マグネシウム epsomite MgSO₄·7H₂O (斜方)である

ことを実物で立証できたのが我が正倉院薬物中に残る盛唐時

渡来した芒消である。その貴重な資料の調査によつて、朴消と芒消および消石の関

係も明らかとなつた。図は正倉院芒消の結晶形態である。*



芒消 (瀉利塩) 含水硫酸マグネシウムの結晶

正倉院薬物中のもの

* (文献) 朝比奈泰彦

る古代石薬の研究

- 正倉院薬物 (一九五)
- 五) 益富寿之助 正倉院薬物を中心とす (一九五七) (益富)

(七) 結搏ハ脈搏結滯。

(10) **芒消** (別録) **氣味** 【辛く苦し、大寒にして毒なし】**權**曰く、鹹し、小毒あり。

主治 【五臓の積聚、久熱、胃閉、邪氣を除き、留血、腹中の痰實、(七) 結搏

を破り、經脈を通じ、大小便、及び月水を利し、五淋を破り、新陳代謝せしめる】

(別録) 【瘰癧、黄疸の病、時疾の壅熱を下し、よく惡血を散じ、胎を墮す。膝瘡に傳

ける】(甄權)

馬牙消 (宋嘉祐) **氣味** 【甘し、大寒にして毒なし】**時珍**曰く、鹹くして微

甘なり。即ち英消である。

主治 【五臓の積熱、伏氣を除く】(甄權) 【末にし篩つて眼赤に點け、赤腫

障翳、瀝涙痛を去る。やはり點眼藥中に入れて用ゐる】(大明) 【功用は芒消に同じ】

(時珍)

風化消 **修治** **時珍**曰く、芒消を風と日光の當る處に置き、水氣を消盡して

自ら輕き白粉とならしめたものである。或は瓷に盛つて簷下に懸け、消が瓶の外部

に滲み出たものを刮り下して取るもあり、又別に、甜瓜に消を盛つてその滲み出た

ものを取るもあり、又、黃牯牛膽に消を入れて刮り取るもあるが、いづれも甜消そ

のものではなす。

(12) 「芒消を風と日光の當る處に置き」とある芒消は「朴消」とすべきである。朴消 $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$ は乾燥大氣中では八分子の水 H_2O を失つて白粉化する。これが風化消 $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ である。(益富)

本草綱目卷之四十一
 硝石 硝石一名火硝
 生於中土其色白
 而質堅者為硝石
 其質軟者為芒硝
 其質極軟者為
 浮硝

朴硝芒硝

(硝即皮硝大驚潤燥、煨堅)



主治

【上焦の風熱、小兒の驚熱、膈痰。肺を清くし、暑を解す。人乳に和して塗れば眼瞼の赤腫、及び頭部、面部の暴熱、腫痛を去る。黄連を煎じて赤目に點ける】(時珍)

辛能潤燥鹹能軟堅苦能下泄大寒能除熱朴硝酷

澀性急芒硝經煉稍緩能蕩滌三焦腸胃實熱推陳

致新按致新則竊亦有補於大黃同善邪氣不除則正氣不能復也治陽強之病傷寒

人之傷於寒也必病熱善寒鬱而為熱也疫痢結癖留血停痰黃疸淋閉瘰

癧瘡腫目赤障翳通經墮胎豐城尉家有貓子死腹中時叫欲絕醫以硝石之死者即

上後百一牛亦用此法得活本用治人治畜亦驗經疏曰硝者消也五金入石善能消之况藏府之積聚乎其直注無邪之性所謂無至不破無熱不蕩者也病非熱邪深固閉結不通不可輕投恐誤伐下焦真

陰故也或無已曰熱淫於內治以鹹寒氣堅者以鹹輕之熱盛者以寒消之故仲景大陷胸湯大承氣湯開承氣湯皆用芒硝以軟堅去實熱結不至堅者不可用也佐之以苦故用大黃相須為使許譽卿曰

芒硝有破結煨堅大黃推導走而不守故二藥相須同為峻下之劑王好古曰本草言芒硝墮胎然娠振身寒不可下者兼用大黃以門藥頓堅錮熱而母子相安總曰有故無殫是無遺也此之謂藥自病

當之故母與胎俱無恙也硝則柔五金化七十二種石為水生於鹵地刮取煎煉在底者為朴硝

在上有芒者為芒硝有牙者為馬牙硝置風日中消盡水氣輕白如粉為風化硝

大黃為使本經別錄錄朴硝硝石雖分二種而氣味主治略同後人辯論紛然究無定指李時珍曰朴硝下降湯水性寒硝石為造炮硝上升湯火性溫昇按世人用硝從未有取其上升而溫者

李氏之說恐非確論

96 芒硝・朴硝 (大イニ瀉シ、潤ホシ燥ヲ、軟ニス堅ヲ)

① 辛能潤、燥、鹹能軟、堅、苦能下泄、大寒能除熱。

② 朴硝、酷溢性急、芒硝、經鍊稍緩。

③ 能蕩滌、三焦腸胃、實熱、推陳致新。

④ a 治陽強之病、傷寒疫痢、

b 積聚結癖、留血停痰、

c 黃疸淋閉、瘰癧瘡腫、

d 目赤障翳、通經墮胎。

⑤ 硝能柔五金、化七十二種石爲水。

⑥ 生於鹵地、刮取煎煉、在底者爲朴硝。

⑦ 在上者爲芒硝。

⑧ 有牙者爲馬牙硝。



三、芒 硝

稟堅を主る。故に結胸、心下石鞭、鞭滿、燥屎、大便鞭、宿食、腹滿、小腹急結、堅痛、腫痞等諸般の解し難きの毒を治し、潮熱、讖語、瘀血、黃疸、小便不利を兼治す。

朴消降_二泄_一宿食煩熱_ラ。通名。消硝義同。

本經曰朴消味苦寒主百病除寒熱邪氣逐積聚結

固綱目曰能消化諸物故謂之消案其味鹹微苦性

大寒順降故能消化宿食瀉滌胃實之功尤速

橘皮大黃朴消湯繪食之在心胸間不化吐復不出

速下除之_ラ云

芒消潤質專消熱結。通名。

別錄曰芒消味辛苦大寒主五臟積聚久熱胃閉除

邪氣破留血利大小便案其味鹹微苦質潤降故能	潤燥專消腸胃中熱結與大黃同用則治熱實腹滿	痛大便難等○忌火故方後曰去滓內芒消微火煮	大承氣湯手足蹇然而汗出者此大便已難也	調胃承氣湯傷寒吐後腹脹滿者喻嘉言曰觀仲景	增此一味而曰大去此一味即曰小且諸所欲下者	必曰先與小承氣則芒消之峻可知至調胃承氣恐	其破胃氣故去枳朴而加甘草故曰調胃
----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------------

芒 消 ぼうしよう 本名 消石

品考 芒とはノギのことなり、ノギとは穀物の穂先に附いてゐるトゲ、殆ど目に見えぬ程の細き短かき鋭きものを言ふ。消とは消ゆる又はうせる又はちる等の義にて原形を失ふの意を現はす言葉なれば、消石とは氣中に於て風化して結晶消散して白き粉となる石と言ふこと、

その芒消と稱する理由は消石が鹵地に於て自然と結晶する様子が恰度ノギの如く見ゆる所から來たものなるべし。又芒消によく似たる品に朴消あり、本經では芒消の次に記載せり、曰く朴消味苦寒、百病の寒熱邪氣を除き六府の積聚、結固、留癖を遂ふことを主どり能く七十二石を化す、鍊りて之を餌服すれば身を軽くし神仙となると。

所で芒消の本名消石を火藥製造の原料たる硝石とする説あり、又朴消の朴の字をあらき則ち精製せざる義に取りて朴消を粗製の芒消のこととなすの説もあり、芒消をカリウム硝石とするの説は次の如し、本草綱目に曰く時珍曰く本經に消石一名芒消とある此芒消とは結晶の形狀より附けられたる名稱にして普通唱へらるる所の芒消（硫酸ナトリウム）のことにはあらずと、時珍先生また曰く芒消に陰陽の二種ありて消石の芒消は性辛温陽に屬し朴消の芒消は性苦寒陰に屬すと。

相似たる結晶物をそのハタラクに依りて陰陽の二種と見立てたる事は甚だ良しと雖も、同じく本經に味苦寒と有るを辛温とは少し無理の聞こえあるべし、但し此辛温は苦寒の朴消に對せる意味にして其藥用上の効果に於ては矢張り本經謂ふ所の苦寒の働きをなすものと先生の御意見は正に斯くの如くに候はん。

扱てボク曰く古方に用ひる芒消とは則ち消石のことにて本經に在る朴消こそ火藥に用ひる焰消と看るべし但し金匱に用ひられある所の橘皮大黃朴消湯の朴消だけは之を粗製の芒硝の義にとるが宜しかるべし、之は兩藥の效能の差を以て考ふれば正に了然たる所ある筈なり、故にボクは消石を以て芒消の本名となし金匱に有る朴消の朴の字のみをひとり粗製の意を表

はすものとしそれに本づいて説を加へたり。

通常結晶硫酸ナトリウムを以て此に充つ。結晶硫酸ナトリウムは無色無臭の小稜柱狀結晶をなし、氣中に放置する時は白色の粉末となる。味苦くして鹹味あり。ボク未だ中華産の芒消を知らず、昔朝鮮の一友人より彼等の使用する芒消なる物を頂戴致したる事あり。鼠色をしたるザラメ程の細結晶をなし、臭ひなく味は甚だ鹹にして苦味少し、多少潮解してシットリとして居たり。ボク其の苦み少く鹹味多き點に疑ひを抱き、簡單なる試験を行ひしにクロールの反應著しく硫酸の反應は甚だ微弱なり。由つて其の友人に此は粗製の鹽にてはなきやと質問したる所其の友人大いに晒ひて、鹽と芒消との區別が付かぬ様にては漢藥の取扱ひは零なるべし、芒消はよく燥きたるを潤ほす性あり。其の潤す性が芒消の藥効なり。故に胃中の燥き熱したるに用ふべし。此物既に斯く潤ふ。自ら潤ふ者に非ざれば他を潤ほす事難かるべし。修身齊家治國平天下の理論は藥を用ひる上に於ても變り無きなりと、大いにまくし立てられ頂を抱へて逃げ出したる事あり。是に由つて之を考ふれば中華の品は知らず朝鮮の芒消と稱する物は粗製のクロールナトリウムの名稱にはあらざるや。

撰用 結晶硫酸曹達を使ふのが本當なるべし。若し中華産のものありて苦寒の氣味に合ふ物あらば之は更に結構の品と言ふべし。

効用 本經に曰く消石味苦寒五藏の積熱胃の脹閉を主どり蓄結飲食を滌去し陳きを推し新を致し邪氣を除く、之を鍊りて膏の如くし久服すれば身を軽くす、芒消。

藥徵に曰く堅をやはらぐるを主どるなり故によく心下痞堅、心下石韃、小腹急結、結胸、

燥屎、大便秘を治し旁ら宿食、腹滿、小腹腫痞、等の諸般難解の毒を治する也と。ボク曰く芒消は味苦寒燥けるを潤はし熱を鎮め血行を能くするの効あり、故に裏に熱ある諸病に用ふ。

2 芒硝 (ぼうしょう)

処方名 芒硝・元明粉・玄明粉。

基原 天然産の芒硝(硫酸ナトリウム sodium sulfuricum)を結晶精製したもの。風化したものは結晶水を失って白色粉末となる。これが元明粉である。

性味 味は鹹・苦、性は寒。(婦經：胃・大腸・三焦經)。

主成分 芒硝の主成分は硫酸ナトリウム $\text{Na}_2\text{SO}_4 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$ で、元明粉は無水硫酸ナトリウム Na_2SO_4 である。

薬理作用 瀉熱通便。

主として瀉下作用がある。硫酸ナトリウムは腸壁から吸収されにくく、腸内で水に溶解して高浸透圧の塩溶液を作るので、腸管内に多量の水分を保って腸管を拡張し、蠕動を強めて排便する。このように芒硝は機械的な刺激による瀉下薬である。一般に服用後4～6時間で排便し、腸の絞約痛などの副作用はない。

元明粉は芒硝より作用がおだやかである。

臨床応用

(1) 熱積の便秘に用いる。腸管内に水分を保持することによって下痢をおこし、胃腸の熱をさまし糞便をのぞく。大黃などの薬物を配合するが、胃腸の炎症がはげしいために、痞(上腹部が硬くはってつかえる)・瀉(腹部の膨満)・燥(糞便がかわいて硬い)・実(熱積の便秘)などの症状があるときには、大黃・厚朴・枳実を配合し、たとえば大承氣湯を用いる。

大承氣湯は強力な瀉下剤で、作用は小承氣湯より強い。実験によると、大承氣湯は消化管の蠕動を明らかに増加し、また家兎の人工的な腸重積の還納を顕著に促進する⁷⁻⁹⁾。

最近、急性腸閉塞（主として機能性腸閉塞）に対する中西医結合による非手術療法に、加味大承気湯（大承気湯加炒萊菔子など）を応用し、好結果を得ている¹⁰⁾。ただし、弁証を確実にすることが必要で、はげしい腹痛・便秘・発熱・尿が濃い・圧痛がひどい・脈は沈数・舌苔は黄燥などの熱結*の症状があるときだけに用いる。

熱象と便秘の程度が軽いときには、芒硝に大黃・甘草を配合した調胃承気湯を用いる。

(2) 小児の急性咽喉炎に用いる。咽喉がはれて痛むときには、竜腦・硼砂などを配合した粉末を患部に噴霧する。

このほか、芒硝は瀉下すると同時に子宮の収縮を促進するので、死胎を娩出するのに用いる。芒硝24gに平胃散（蒼朮・厚朴・陳皮・甘草）を適当に加えて服用する。

使用上の注意

(1) 実熱以外には芒硝を用いない。機能低下による老人の便秘にも芒硝や元明粉を使用するのはよくない。慢性病の衰弱による便秘に用いる必要があるときは、滋補の方剤に加えるだけとする。

(2) 習慣性便秘には一般に芒硝や元明粉は用いない。ただし、瀉下作用を強める必要があるときは、麻子仁・栝楼仁・杏仁を基礎にして元明粉を適量加える。

用量 常用量は2.5～12g。沖服する。元明粉は少量では2.5～5g、多量では9～12g。瀉下作用を強めるときは15～24gまで。

* 熱積の便秘。

方剂例 (1) 大承気湯（《傷寒論》）：生大黃12g（後下） 厚朴9g 枳実9g 元明粉9g（沖服） 水煎服。

(2) 加味大承気湯（天津市南開医院）：厚朴15～30g 炒萊菔子15～30g 枳殼15g

桃仁9g 赤芍15g 大黃15g（後下） 芒硝9～15g（沖服） 水煎服。

(3) 調胃承気湯（《傷寒論》）：生大黃9g（後下） 生甘草3g 元明粉6g（沖服） 水煎服。

芒硝

〔性味帰経〕 性は寒，味は辛，咸，苦。胃経，大腸経，三焦経に入る。

〔効能〕 1 瀉熱導滯。2 潤燥軟堅。

本品の気味の寒威は、潤下軟堅の作用があり、苦味は降泄、瀉熱通便の作用がある。従って腸胃に実熱が積滞して起きる大便秘結、譫語、發狂などの症状に適用する。また本品の瀉熱解毒作用を利用して、目の充血や腫痛、癰瘡の腫毒、咽喉や口腔の腫痛糜爛を治すのに外用することができる。

〔配合応用〕

1 芒硝十硼砂

芒硝の腸胃の熱を瀉下して解毒する働きと、硼砂の清熱し解毒して腐蝕を防ぐ働きとの組み合わせである。これらに清熱止痛作用をもつ氷片(龍腦)と、解毒防腐作用をもつ朱砂を加えた方剤を〈氷硼散〉といい、この方剤は解毒瀉火、防腐、止痛の効能をあらわすので、咽喉の紅腫、口舌生瘡などの症状に外用薬として用いる。

2 芒硝十大黄 大黄の項参照

〔常用量〕 6g～12g

〔禁忌〕 本品は妊婦には忌用である。

〔参考〕 本品は、天然の硫酸ナトリウムを加工精製して結晶体 (*Mirabilium de puratum*) としたものである。

本品は硫酸ナトリウム、塩化ナトリウムを含有する。そして瀉下作用と解毒作用とがあり、口腔と眼の疾患を治療することができる。

このほか、本品には朴硝(硫酸ソーダ)と芒硝と元明粉の三種類がある。これらの効能はだいたい同じであるが、朴硝は不純物が比較的多く、芒硝は比較的純粋、元明粉は最も純粋であって瀉下力は比較的緩和である。また、芒硝を空气中に放置して風化したものを“風化硝”といい、喉と口腔疾患に用いることが多い。

